

伊藤整が描いた〈恋愛〉

——キリ子ものの連作を中心に

飯 島 巳 夢

第一章 キリ子ものの連作とは

キリ子ものの連作とは、伊藤整が意識の流れの手法を用いて書いた小説であり、伊藤整研究を牽引していた曾根博義によると、後記の六つの短編が連作に該当する^①。

- ・「蕾の中のキリ子」(『文芸レビュー』昭和五年一月)
- ・「ア・マドモアゼル・キリ——ぼくが見た夢——」(『文学風景』昭和五年十二月)
- ・「キリ子の朝」(『時事新報』昭和六年一月)
- ・「M百貨店」(『新科学的文芸』昭和六年五月)
- ・「プラタナスと脚」(『近代生活』昭和六年六月)
- ・「歯は微笑からこぼれる」(『創造』昭和六年十二月)

物語に登場する人物は、パルナス座の女優・三輪キリ子、脚

本家・鳴海梅吉、パルナス座の俳優・鹿山光、文科大学生兼鳴海の友人・草野均の四人であり、主人公のキリ子をめぐって、それぞれの恋愛意識や葛藤などが描かれているのが特徴的な連作ものだ。

キリ子ものの連作を取り上げた研究は少なく、意識の流れの手法に着目して考察した論と、連作内の一作品である「M百貨店」をモダンイズム文学として位置づける論の、二種類がある。

まず、意識の流れに注目した論を取り上げていく。

②辛は、伊藤整の初期小説における意識の流れは経験不足や理解不足による未熟さがあることを指摘している。また、鏡味も「蕾の中のキリ子」や「M百貨店」は、意識の流れの手法を模倣して書くという意図が強く、内容が伴っていないと評価し、小説を創作する経験が少ない状態で行った故に失敗していると述べている。曾根や北條は、文章の人称代名詞に着目し、地の文と意識の流れが「私」で統一しているために、「私」が見た

状況描写と、「私」の意識の流れの分け目が曖昧になっていることは否めない、とやはり意識の流れの手法がうまく活かされていないことを指摘している。ただ、曽根は「M百貨店」などで状況描写を三人称に変えたことで、思いがけない見通しが開けたと好意的な見方もしている。

次に、「M百貨店」をモダニズム文学として位置づける研究を取り上げる。

中村は、「M百貨店」の構想は、百貨店観、身体観、小説観の三つのレパートリーに分かれるとし、百貨店という場所が持つ意味を考察している。百貨店空間は開放的であり、それによって相互に物色する視線の交錯を生み出されていることを指摘し、「大衆社会の匿名性と自由な関係性」とに対応した、大衆社会の社会システムの典型^⑦であると述べている。中村は、「大衆社会の象徴たる百貨店のトポロジー」に注目し、考察を行った。

この中村の研究を基本として、ベンヤミンの「パサーージュ論」^⑧を援用した考察を行ったのが崔である。崔は、中村が指摘していた百貨店空間の他に、登場人物と資本主義の関係性に注目した。草野のことを「ブルジョアジーが「無為」を見せびらかすほどの経済的に成熟した状態」^⑩つまり、フラスコ^⑪とし、キリ子を「大衆の欲望を刺激して自分の身体が消費される」存在、流行していたモノがすぐに忘却の彼方に押しやられてしまう資本主義社会の、「商品化された人間」^⑫であることを指摘した。崔論は、資本主義社会によって生まれたモノ・ヒトを中心として、

「M百貨店」のモダン性の考察をしている。

どちらの研究も、連作で一貫して描かれている〈恋愛〉にはあまり触れておらず、連作の内容自体の研究が手薄である。そこで、本稿では、キリ子もの連作に描かれた〈恋愛〉と伊藤整の観念がどのように関わっているのかを明らかにしたい。

第二章 恋愛・結婚

キリ子もの連作の考察を行う前に、そのための予備作業として当時（昭和初期）の恋愛・結婚に関わる意識と、『女性に関する十二章』からみた伊藤整の恋愛・結婚に対する意識を比較する。

はじめに、昭和初期に浸透していた恋愛・結婚に関わる意識についてまとめる。

恋愛は、明治時代に日本に伝わってきた概念である^⑬とされている。洪世峨は、これに対して、それまでの日本における恋は、「肉体的な情欲」、つまり、情事などを指す「色」だったと指摘している。日本が近代化していく中で、西洋文明とともに持ち込まれたキリスト教の影響を受け、それまでの「色」を野蠻とし、精神を重んじる考えが生まれた。この宗教的な要素を持つ恋愛は、神聖なものとして捉えられていた。この、肉体を否定するキリスト教的な愛の理想が、「結婚は恋愛によってのみ正当化され、性交渉は結婚によってのみ正当化されるという、ロマン

ティック・ラブ・イデオロギーを近代日本にもたらす」ことになったという。

東園子⁽¹⁶⁾は、このロマンティック・ラブ・イデオロギーが成立した背景として、社会の産業化が深く関わっていることを指摘している。はじめは、「神聖なもの」として捉えられていた恋愛は、その神聖さも相まって、結婚と結びつけられるようになり、そして、女性を家庭に閉じ込める、国家形成のための道具になってしまった。情緒的存在である女性を、この概念によって結婚させることで、家族に対する「愛情」を「家事労働」で表現するという良妻賢母の考えと絡めて考えられるようになったのである。

では、その良妻賢母に関する考えは、一体どこで培われていたのだろう。

高等女学校で行われていた修身教育では、良妻賢母の思想が取り入れられていた。修身教育で使用される教科書には、「男⁽¹⁷⁾外、女⁽¹⁸⁾内」と男女の分業をはっきりと分け、しかも女の役割が単に家庭内だけでなく、国家にとっても重要であることが主張⁽¹⁷⁾されておき、家事育児を行うことが女性の役割とするような教育が多かった。また、内閣府によるコラムでは、高等女学校による良妻賢母教育について触れ、国語や歴史などの一般科目以外にも、「家事」や「裁縫」などといった男子の旧制中学校にはない科目が設定されていたことを指摘している。さらに、卒業生の進路を見ても、多くが「家庭」であり、就職者の

割合は極めて低く、高等女学校は良妻賢母の育成を期待した場であり、女性が就職するための能力を養う場ではなかったと言つて良いだろう。

当時の、良妻賢母思想による修身教育が戦後になるまで変化していないということを踏まえると、「女性は結婚したら家庭に入り、夫に尽くす」という考えが社会的通念として浸透しており、それは昭和初期においても依然として存在していたと考えられる。

次に、『女性に関する十二章』から見た伊藤整の恋愛・結婚に関する意識について確認していきたい。

伊藤整は西洋思想の恋愛として、イエスの隣人愛を取り上げ、「他人のエゴをも自分のエゴと同じように尊重してやろう、とする大変な努力、他人への働きかけ⁽¹⁹⁾」であると述べている。しかし、一般の男女の間にある愛は「自分はあの人が好きだからあの人の心と身体を独占したい、という強烈なエゴの働き⁽²⁰⁾」であり、後者の愛が両者の間に一致している場合には、イエスの説く愛以上の形をとると考えている。「肉体と心をもつて、たがいに相手にしてもらいたいことが一致した、という時、この二人の関係は、イエス氏の言った愛とほとんど同じ形で成り立ちます。しかもそれは、イエス氏の考えた愛よりもっと完全⁽²¹⁾」であるとし、精神的・肉体的に相手を独占することが「完全な愛」であるとしている。

良妻賢母に関しても、「修身的な考え方の形式の中には、伊藤

整氏にとつて、有利であると考えられた点も大分ありました。

それは、女なるものは、ヨメにいったら夫に「仕える」ものである⁽²²⁾と、修身教育のなかで、そういった教育があったことに触れている。伊藤夫人もこの修身的責任を実践していたようで、「結婚した女性が夫である男性に尽くす」という考えが存在しており、当時の知識人にもそれが認識されていたことがわかるだろう。しかし、「新憲法も成立しなかったうちに、伊藤整氏の家庭では、現在の新憲法下の理想的家庭秩序と同質のものが、早くも成立していました⁽²³⁾」と、男女平等を思わせるような発言も行っている。

昭和初期と伊藤整の、恋愛・結婚に関する意識について、簡潔にまとめると左記のようになる。

ロマンティック・ラブ・イデオロギーによつて、結婚は恋愛の上に成り立つものだという考えがあった。恋愛と結婚が結びつけられるきっかけになったのには、「恋愛が神聖なもの」という価値観によるもので、その「恋愛」は西洋の宗教的思想から精神的な繋がりを重視していた。それに対して伊藤整は、精神面だけでなく、肉体面を含むことで「完全な愛」になり得ると論じた。

結婚については、良妻賢母教育が存在しており、これは当時を生きた伊藤整も教育として「良妻賢母」の考えがあったことを指摘した上で、戦後に普及していった「男女平等」が自分の家庭内で既に行われていたことを示した。この男女平等の考え

が、いつから伊藤整の中にあつたのか正確な年代はわからないが、明治から西洋思想が輸入されており、その中に個人主義という考えも含められていたことや、青鞥社などの試みを考えると、昭和初期の段階で、知識としての「男女平等」があつても不思議ではない。

以上のことから、当時の恋愛・結婚に関する意識と、伊藤整の恋愛・結婚に対する意識は異なっていることがわかった。精神・肉体ともに繋がりがある状態を完全な愛とする恋愛観、そして、結婚しても男性に仕えることはないという男女平等の考えを持った結婚観、この伊藤整の意識が、キリ子もの連作にどのように関わっているのだろうか。

第三章 キリ子もの連作における〈恋愛〉⁽²⁴⁾

繰り返しになるが、本稿でのねらいは、キリ子もの連作内に描かれている〈恋愛〉に注目することである。そのため、各作品で描かれている〈恋愛〉を中心としたあらすじを記載し、〈恋愛〉の動きや、作品の連続性について確認していきたい。

「蕾の中のキリ子」は、鳴海がキリ子を自分のものにする⁽²⁵⁾と決意する物語である。一七歳の少女であるキリ子が、誰かのものになり、無邪気で純粋なキリ子でなくなってしまうことを恐れ、彼女の周りにいる男性を警戒している。船に揺られる中で、キリ子を今のキリ子のままに保っておきたい、という欲を抱いて

いることに気づいた鳴海は、誰かに取られてしまう前に、自分のものにすることを決意する。

「ア・マドモアゼル・キリ——ぼくが見た夢——」は、語り手の「僕」が見た夢の話を描いた物語である。経営者の浮見とともにキャバレーに入ってきたキリ子が、「僕」に気づかずに通り過ぎていくのをマツキンノンに目撃され、からかわれたという夢である「仮想の恋人に送る手紙」の一遍として発表されたものである。また、キリ子もの連作として位置づけた曽根自体も、「この掌編ではキリ子は「僕」と同居しているタイプストということになっていて、連作との関連は微弱といわざるを得ない」と指摘しているため、他作品と物語の関連性は薄いと考えられる。

「キリ子の朝」は、キリ子がマチネに行くための準備をする朝の様子を描いた物語である。鳴海が自分のことをどう思っているのか考えたり、舞台で鹿山と密着したことを思い出したりと、自分に対して好意を抱いている男性のことを浮かべながら準備を行っていく。「結婚なんかしない」と思いつつも、鳴海に立派な収入ができたら……と鳴海との結婚を仄めかすようなことも考えている。キリ子が、鹿山よりも鳴海の方に惹かれていた様子が描かれる。

「M百貨店」は、キリ子に好意を抱き、キリ子について色々と考える草野・鹿山と、二人の好意に気づき、「もしも」を想像するキリ子の意識の流れが描かれた物語である。キリ子と鳴海

が婚姻関係にあることを知りながら、草野は、鳴海がもし病気で倒れたら自分がキリ子を……とキリ子が自分のものになるかもしれない可能性を妄想し、鹿山は、キリ子に失恋したと考え、もつとアピールするべきだったと後悔する。キリ子は、草野がまだ自分に好意を抱いているのか試したり、鹿山は男として惹かれていたと独白したりと、鳴海と結婚していながらも、他の二人の好意に対して未練があるような考えが目立つ。

「プラタアヌと脚」は、M百貨店を出てキリ子と別れた草野がバスに乗る物語である。女車掌や洋装姿の女性客の脚を見ながら、先ほどまで一緒にいたキリ子について考え始める。自分とキリ子の恋愛は、精神的に接近しすぎている文化人の恋愛だと定義しながら、本当は精神的には友人で、肉体的には恋人のような関係になることを望んでいる。また、鳴海にとってキリ子は重荷だったのではないかと、キリ子の前で無理をする鳴海の姿を見たくないと述べている。

「歯は微笑からこぼれる」は、草野が散歩コースの公園でキリ子に似た少女に出会う物語である。キリ子に似た少女とキリ子を比較して、キリ子に抱いている想いを自覚した草野は、マチネに行つてキリ子を見ることで自分の気持ちが高ぶったのか確かめようとする。だが、その前に友人の鳴海に会おうと思ひ立ち、鳴海の家を訪ねる。草野が鳴海との会話を楽しみ、マチネに向かっていく様子が描かれたあと、語り手の視点はキリ子へと移る。舞台上歌うキリ子の声量のない声、それを誤魔化すように

笑ったキリ子が、マチネに來た二人に気づき、素早く幕のかげに入っていく場面で物語が終了する。

これらのあらすじから、「物語の時間軸が進行している」、あるいは「登場人物の関係性が変化している」ことが読み取れるのは、「蕾の中のキリ子」、「M百貨店」、「プラタアヌと脚」、「歯は微笑からこぼれる」の四作品である。そのため、この四作品の中で描かれている〈恋愛〉について、考察していきたい。

第二章で、昭和初期に浸透していた恋愛の考え方と、伊藤整の考える完全な愛が異なることを整理した。そこで、キリ子との連作における恋愛意識がどのように描かれているのかを考え、伊藤整の観念との関連性を分析していきたい。キリ子との連作の中で、キリ子と恋愛関係にあると考えられるのは、キリ子と婚姻関係にある鳴海、自身とキリ子を「文化人の恋愛」として位置づけた草野の二人だと考える。そのため、この二人の人物とキリ子との関係性の考察を行う。

はじめに鳴海とキリ子との関係性について考えていきたい。鳴海が語り手として登場する作品は、「蕾の中のキリ子」しかないため、「蕾の中のキリ子」から、鳴海がキリ子に対して抱いている感情について分析する。

まず、鳴海はキリ子のことを、無邪気で純粋な存在だと考えている。それ故に、舞台上で踊るキリ子を性的に見ている男性たちの眼を「濁った醜惡な男等の幾百の眼」と、「醜惡」という言葉を用いて拒絶している。また、「あの表情ときり離してキ

リ子に別な一人の女としての性的な意識を考えることが出来るか。」⁽²⁷⁾と考えたり、キリ子から「赤ちゃんがほしい」などといった「女性」を意識させるような言葉を聞きたくないと思ったりするほど、キリ子を性的な眼で見ることを嫌がっている。こういった点から、キリ子の純粋さ、無邪気さなどの精神面に惹かれているが、肉体的には惹かれていないこと、むしろ、性的に見ることを否定していることがわかる。さらに、性的に見ることを拒否するだけでなく、「私があの子供らしい肉体と精神とを尊重してその保護に全力を用いることが私にやがて彼女を約束するか」⁽²⁸⁾と、キリ子をそのままに保ち、汚れてしまわないように守っていきたいという想いが強い。

キリ子を世の外の女たちと同じ意味でよごしてしまうこと。たとえば座長の十七人目または五十三人目。その最近の一人目にするために、ただそれだけのために彼女が駄目になること、そんなことが許される。⁽²⁹⁾

右の引用は、沢山の女性と関係を持っている座長の標的にキリ子選ばれてしまったらどうしよう、と想像する鳴海を描いた場面である。ここでの「キリ子を汚してしまうこと」とは、キリ子が誰かのものになり、その誰かと肉体的な関係を持つことだと考えられる。誰かのものとなり、その人に染められてしまったら、純粋で無邪気なキリ子ではなくなってしまうと考え

た鳴海は、自分がキリ子を手に入れて、今のキリ子を保護することを決意する。

以上の点から、鳴海がキリ子に対して抱いているのは、「キリ子を今のままに保ちたい」という想いである。キリ子の純粹な精神に惹かれてゐる鳴海は、彼女と肉体的な関係を持つことは望んでいない。よって、鳴海の恋愛感情は、精神を重要視する「神聖な恋愛」であると考えられる。

次に草野とキリ子の関係性について述べる。草野が語り手として登場する作品は「M百貨店」、「プラタナスと脚」、「歯は微笑からこぼれる」の三作品である。これらの作品から、鳴海と同様に、キリ子に抱いている感情を分析し、草野の恋愛感情について考察を行っていく。

M百貨店でキリ子と買い物をしてゐた草野は、以前、手違いで見てしまったキリ子の裸体を思い出したり、階段を登ったときに「大鏡に写ったキリ子の脚、腰、顔、俺はさり気なくキリ子の全身を盗み見」⁽³⁰⁾たりするなど、キリ子の肉体を意識している場面が多い。また、M百貨店の帰り道に、自身とキリ子との関係性を振り返りながら、「精神的には友人で、肉体的には恋人になることを秘かに欲している」⁽³¹⁾。さらに、「歯は微笑からこぼれる」では、「彼がキリ子に精神的によりも、むしろ肉体的に魅力を感じてゐると彼は自分でも知つてゐた」⁽³²⁾と、キリ子の肉体に惹かれていることを自覚したとあることから、キリ子を性的に意識していることがわかる。

他にも、草野は「俺がキリ子を考えているのは、古風な意味での恋愛ではない。そういう恋愛をするには、俺はキリ子に接近しすぎている。異性の接近は肉体的なのが正当な形態だ。それを精神的にのみ接近しすぎている」⁽³³⁾と考えており、異性が肉体的に接近することは、むしろそれが正当であると、肉体的な関係を持つことに対して、負のイメージを持っていないことがわかる。

これらの点から、「精神は友人、肉体は恋人」と、精神・肉体ともにキリ子と良い関係を築きたいと考えている草野が抱いている恋愛感情は、伊藤整の考える「完全な愛」であると考えられる。以上のことから、キリ子もの連作における恋愛感情には、当時の社会において神聖と考えられていた精神的な恋愛と、伊藤整が完全だと考える精神・肉体含めた恋愛の二つが描かれている。

続いて、連作の主人公であるキリ子についてその特徴を考察していきたい。

まず、キリ子の外見に注目していく。キリ子は、「美しく刈りあげられた」⁽³⁴⁾首筋が見えるような断髪姿をしている一七歳の少女である。また、「M百貨店」では、自他共に魅力的だと認める脚が見えるような「薄緑を基調にした単純な洋装」⁽³⁵⁾をしている。断髪姿で洋装のキリ子を、青木淳子が「キリ子は刈り上げられた、つまり断髪のモダンガールである」⁽³⁶⁾と指摘しているように、キリ子はモダンガールの特徴を持つ女性であると考えら

れる。

次に、キリ子の結婚後の様子に着目して考察していく。結婚した女性は、家庭に入って夫や子どもに尽くすというのは、前章で確認したとおりである。そういった価値観が当たり前とされていた中で、キリ子は鳴海と結婚してからも、女優として活躍し続けている。また、子供についても「妊娠しないようにしなければ」と述べていることから、自分が女優を続けることが第一であり、夫や子供のために尽くすという考えはキリ子の中にはない。また、「女優」という職業は、大正一五年に主婦之友社が発行した『現代夫人職業案内』の中に記載されている職業であり、職業婦人に関する研究を行っている山崎貴子³⁷⁾が、高い学歴や技能を有する教師や医師などを行った専門職・技術職、技術や芸能関係の職業に就く女性のことを指す「伝統的職業婦人」に、女優も含まれると指摘していることから、キリ子は「職業婦人」であることがわかる。この「伝統的職業婦人」は、学歴や専門性が高い職業であるため、所得も社会的地位も高く、「社会的に自立した存在」であった。

これらの点から、若者の流行だった「モダンガール」の特徴を持ち、社会的通念であった「女性は結婚したら家庭に入る」という流れに影響されることなく、女優として働き続ける「社会的に自立した人間」であるキリ子は、「新しい女性」であったと考えられる。

第四章 結論

本稿では、伊藤整のキリ子ものの連作を〈恋愛〉を軸に考察することを目的とし、昭和初期の恋愛・結婚に対する価値観と、伊藤整の価値観を比較することで、連作の中で描かれている〈恋愛〉はどういったものなのかを明らかにしようと試みた。

まず、昭和初期の恋愛・結婚について、昭和初期の恋愛は、精神的な繋がりを重視する宗教的な恋愛が神聖なものという考えがあった。そこから、ロマンティック・ラブ・イデオロギーという概念が生まれたことを取り上げた。また、結婚に対しては修身などの良妻賢母教育によって、妻は夫や子供に仕えるべきという考えが浸透していたことがわかった。対して、伊藤整は、精神的・肉体的ともに独占したいという両者の想いが一致した場合、それは宗教的恋愛よりも完全な愛といえると定義し、結婚においても、妻（女性）が仕えるのではなく、男女平等のもと、行うべきであると考えた。

こういった価値観を持った伊藤整が描いたキリ子ものの連作における〈恋愛〉は、神聖な恋愛と伊藤整の考える完全な愛の二種類が存在し、この二つの恋愛意識がしっかりと使い分けられて描かれている。また、その〈恋愛〉の中心人物であるキリ子は、モダンガールの特徴を持った人物であり、さらに、当時の「女性は結婚したら家庭に入る」というイデオロギーに支配されることなく、一人の人間として社会的に自立している「新しい女

性」である。

以上の点から、連作の軸となっているのは、「恋愛」であり、「新しい女性」を主人公とした恋愛物語を描くことによって、当時の女性たちに対して、これまでの価値観とは異なった生き方を示したのではないかと考える。キリ子ものの連作を「意識の流れを使った小説」や「モダニズム文学」として評価をする前に、連作に描かれている内容に注目し、「恋愛物語」として捉え直すことができるのではないだろうか。

- 注(1) 曾根博義編『未刊行著作集12伊藤整』(白地社、平成六年六月) 内での「解題」(二二・三三頁)を参照している。
- (2) 辛大基「李箱と日本モダニズム小説——伊藤整の初期小説との比較を中心に」(『千葉大学社会科学文化科学研究』平成一六年二月)
- (3) 鏡味國彦「日本におけるJames Joyceの紹介とその影響について——昭和初年代の伊藤整を中心として」(『立正大学人文科学研究所年報』昭和五三年三月)
- (4) 曾根博義「伊藤整全集未収録」意識の流れ」小説三篇——復刻と解題——(『語文』昭和六二年六月)
- (5) 北條文緒「ジェイムズ・ジョイスと日本近代小説(一)——ジェイムズ・ジョイスと伊藤整の「新心理主義」」(『東京女子大学付属比較文化研究所紀要』昭和五五年)
- (6) 中村三春「『百貨店小説』のモダニティ——「M百貨店」論

——」(『山形大学紀要 人文科学』昭和六四年一月)

- (7) 注(6)に同じ 四八三頁
- (8) 昭和二年～昭和一五年にかけてペンヤミンが執筆、生前は未刊。一九世紀のパリを取り上げ、資本主義的な生産様式によって支配された商品や生産物に経済的な過程が表現されていることを明らかにし、そこから大衆の実現されなかった願望を読み取った。
- (9) 崔正園「小説におけるフラヌール——伊藤整の『M百貨店』を中心に——」(『文研論集』平成一五年三月)
- (10) 注(9)に同じ 七頁
- (11) フラヌールは、『パサージュ論』において、生活のために生業を持たない存在であり自由な日常を過ごす人を指す。
- (12) 注(9)に同じ 一一頁・一二頁
- (13) 柳父章「翻訳語成立事情」(岩波書店、昭和五七年四月)を参照
- (14) 洪世峨「恋愛の近代——近代日本における恋愛と結婚をめぐって——」(『博士論文』(専修大学、平成二六年三月)
- (15) 注(14)に同じ 二〇頁
- (16) 東園子「近代社会における異性愛形式の展開——恋愛の規範化と「宝塚」・「やおい」——」(『社会学雑誌』平成一五年三月) 二〇五頁
- (17) 小山静子「高等女学校教育と良妻賢母親」(『京都大学教育学部紀要』昭和五六年三月) 一〇〇頁
- (18) 内閣府男女共同参画局「コラム3 高等女学校における良妻

賢母」〈https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r01/zentai/html/column/clm_03.html〉

令和五年二月二日閲覧

- (19) 伊藤整『女性に関する十二章』（初出『婦人公論』昭和二八年一月～二月／中央公論社、昭和二九年二月／引用は、『伊藤整全集 第二十二巻』新潮社、昭和四八年二月発行）五二頁
- (20) 注(19)に同じ 五二頁
- (21) 注(19)に同じ 五三頁
- (22) 注(19)に同じ 二七頁
- (23) 注(19)に同じ 二八頁
- (24) 〈恋愛〉は、キリ子もの連作の中で登場人物たちがしている恋愛を指し、◇のない恋愛は、社会的な概念としての恋愛を指す。なお、「恋愛意識」や「恋愛感情」などの熟語は、◇のない恋愛を使用する。
- (25) 注(4)に同じ 八九頁
- (26) 伊藤整「書の中のキリ子」〔『文芸レビュー』昭和五年一月／引用は、『伊藤整全集 第一巻』新潮社、昭和四七年六月）三三頁
- (27) 注(26)に同じ 三三七頁
- (28) 注(26)に同じ 三四一頁
- (29) 注(26)に同じ 三四一・三四二頁
- (30) 伊藤整「プラタアヌと脚」〔『近代生活』昭和六年六月／引用は、『伊藤整全集 第一巻』新潮社、昭和四七年六月）三七一頁
- (31) 注(30)に同じ 三七二頁
- (32) 伊藤整「歯は微笑からこぼれる」〔『創造』昭和六年二月／引用は、曽根博義編『未刊行著作集12伊藤整』白地社、平成六年六月）三三二頁
- (33) 注(30)に同じ 三七二頁
- (34) 伊藤整「M百貨店」〔『新科学的文芸』昭和六年五月／引用は、『伊藤整全集第一巻』新潮社、昭和四七年六月）三六一頁
- (35) 注(34)に同じ 三六三頁
- (36) 青木淳子「都市空間におけるモダンガール——ファッションを視点として」〔『語学教育研究論叢』平成二八年三月）八〇頁
- (37) 山崎貴子「戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる職業婦人イメージの変容」〔『教育社会学研究』平成二一年一月）九八頁